

スポーツ観戦者の応援行動に関する認識調査 The study of recognition about cheering behavior on sports spectators

1K10C116-1 尾淵 勇
主査 中村好男 先生 副査 塩田琴美 先生

【目的】

本研究は、スポーツ観戦者を対象に、アンケート調査により試合観戦中の応援行動を運動と感じるかどうかを調査し、どういった属性の人が運動と感じるのか、感じないのかを把握する。また介入による認識の変化を調査する。

【研究方法】

・研究 I

①bj リーグの試合観戦者にアンケート調査を行い「応援はスポーツである」と認識する人の属性を特定する。

②応援はスポーツであるとの認識を啓発するようなショートストーリーを作成・配布し、読んだ前後の認識の変化を調査した。

・研究 II

J リーグ試合観戦者にアンケート調査を行い「応援は運動であるか」と認識する人の属性を特定する。

【調査概要】

研究 I : 日時 : 2012 年 1 月 13 日 会場 : 船橋アリーナ(千葉ジェッツ VS 埼玉ブロンコス) 調査票配布数 : 500 票、回収数 164 票(有効回答 134 票)

研究 II : 日時 : 2013 年 7 月 3 日 会場 : 味の素スタジアム(東京ヴェルディ VS 京都サンガ F.C.) 調査票配布数 : 1000 票、回収数 83 票(有効回答 58 票)

【結果および考察】

・研究 I

①応援はスポーツであると認識する人は思う・少し思うを合わせて 79.9%と非常に高い値を示した。さらに応援は疲労感を感じづらい運動であることも判明した。さらに当初の予想に反し、運動不足を感じている人よりも感じていない人の方が応援はスポーツであると認識していることも判明した。運動不足を感じていない人はスポーツであると認識するハードルが低いことが予想される。また応援方法では立位、大きな声を出す、腕を振るに有意差がみられた。これらの応援行動を促すことにより自分が体を動かしているという意識を高られることが予想される。

②ショートストーリーによる介入の結果その前後で有意な変化は見られなかった。対象者が応援はスポーツであると認識している人が多かったため効果が薄かった可能性が考えられる。

・研究 II

応援を運動であると認識する人は年齢、性別に関係な

く約半数となった。また運動行動変容ステージでは関心期、実行期にある人の方が応援は運動であると認識しやすいことが判明した。さらに、運動だと思うものでは歩行や階段昇降を運動であると回答した人が応援は運動であると認識しやすく、運動だと思うものが多い人ほど応援は運動であると認識しやすいことが判明した。これらには運動であると認識するかどうかのハードルの高さに関係していると考えられる。また、運動が好き程度では 7 段階のうち 4 と回答した人は応援は運動であると認識しにくいことが判明した。

【まとめ】

本研究により、応援はスポーツ・運動であると認識する人の特徴を特定することができた。これらには普段の運動習慣、応援方法、運動だと認識するハードルといったものが関係していると思われる。また、研究 I・II で同様の質問をした結果、違う結果がみられた。これには競技の特性が関与していると考えられる。運動を通じた健康づくりを進めていく上でそのきっかけ作りは非常に重要である。引き続き調査により運動習慣を改善する方法の探索が望まれる。

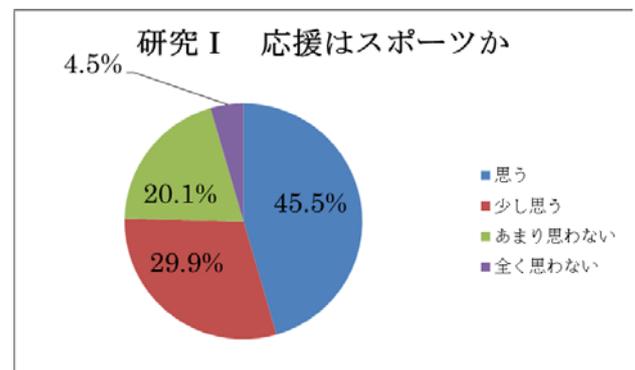


図 1 研究 I 応援とスポーツに関する認識

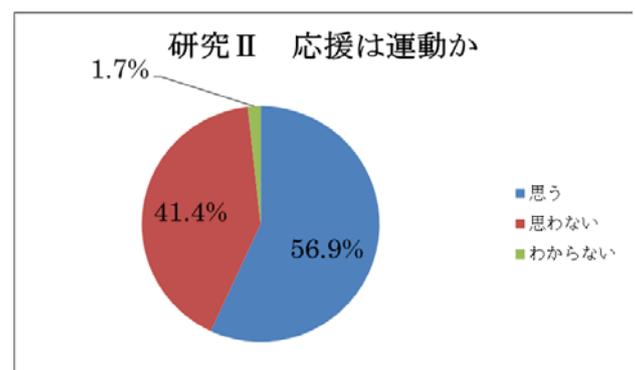


図 2 研究 II 応援と運動に関する認識